2Kp-12

ジャケットの素材物性とゆとり量の認識・着用感との関係

文化女大家政　○柳田佳子　玉木敦子　筋野淑子

目的　人体の運動機能性に対する衣服適合性の要因は、デザイン、パターンメーキング、素材物性、ゆとり量の設定、および着用感等である。そこで素材物性の異なるジャケットに対するゆとり量の認識と、着用感の相違について考察することを研究目的とした。

方法　ジャケットのデザインはテーラードカラーの３面構成で、素材は厚さがほぼ同一の中肉とし、物性の異なる６種類を選出した。パターン、副素材、縫製条件を同一にして、素材別に６着のジャケットを製作した。被験者は満21～24歳の成人女子で、標準体29名である。着用条件は同一のブラウスにジャケットを着用させ、ボタンを止めさせた。実験は静立時および上肢前挙90°の２動作とし、ジャケット着用時のBL位におけるゆとり量に対する寸法の認識と、着用感の良否について、一対比較法（中屋の変法）による官能検査を実施した。その結果より、分散分析、相関分析、回帰分析を行い、考察を試みた。

結果　ジャケット着用時におけるBL位のゆとり量に対する寸法の認識は、静立時ではジョーゼット、テンセル、ストレッチウール、サージ、ギャバジン、グログランの順に大きいと評価され、寸法差は最大1.4 cmであった。動作時ではテンセルとストレッチウールの順位が入れ替わり、寸法差の認識は最大2.3 cmと増加した。着用感に対する良否は、静立時と動作時とに大差はなかったが、ただしジョーゼットとストレッチウールは、動作時の方が評価は高くなった。さらにグログランは静立時・動作時共に、着用感は最も悪いと評価された。結果、グログランは寸法に対する認識は最小、着用感は最低と総合評価した。また、官能量と引張り特性、曲げ特性、剪断特性等の素材物性との間に関係が認められた。